

俊さん、今更此様な事を云ふでもないが、此の兄は、既に一命は君に任せた身です。目前に迫れる奉天攻撃には、必ず人後に落ちん積です。俊さん、どうぞよく御勉強なさい、しをりも時々御覽下さい。間近く色香のあせる時がくるでせう。其の時こそは、此の兄が目覺ましく大君の御爲に一命を捨てた時です、あ、俊さんお母さんを!!! 父様の御墓を!!! 一劍國に盡くさんとするもの、亦家郷を懐はざらんやです、噫!!!

(雨評) 其の趣向、工夫のあとは見たり。

○夏の日友の許に

岩代須賀川本町

服部貞子



浅草觀音堂より仁王門を望む

さても、愉快なる雨にて候ひしかな。轟々ととろき渡る大雷は、何瓏の巨砲の如、閃々たる電光は敵陣をさぐるアークライト、さては、彼我より

打ち出だす弾丸の如き激雨かゝる間に、雷し巨砲は装填や終りけん、霹靂一閃、大地震動して、後の山の一本杉に落雷し命中いたし候されば、これよりは、此の木を露木とや名付け候はんか。雨戸繰りあげ、庭の面を眺め候ひしに、草々皆倒れ伏して、色を失ひ居り候中にたい、燈籠のかけなる白百合一ものみ、惱みながらも清き香を放ち居り候ひき、こはこれ彼の地なるひとりほ、笑まれ候。され健治様のお姿となぞらひ、ば、また快活なるお玉章も、近々のうちと存せられ候先は虹に向ひ、夕日を背にあびて、拙き筆を運ばせ申して候。かしこ